



Title	<研究活動報告>実践的関心と学問的研究：スラブ研究センター研究棟落成式における式辞
Author(s)	伊東, 孝之
Citation	スラブ研究, 28, 141-142
Issue Date	1981
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/5122">http://hdl.handle.net/2115/5122</a>
Type	bulletin (article)
File Information	KJ00000113109.pdf



[Instructions for use](#)

# 実践的関心と学問的研究

スラブ研究センター研究棟落成式における式辞

1981年7月18日(土)

スラブ研究センター長 伊 東 孝 之

本日は、皆さん、私どもの研究センターの落成式においで下さいまして、まことに有難うございます。ごらんのように、この3月末をもって、私どもの建物が立派に出来上りました。増築工事に際しましては、学内の各方面の暖かいご理解とご支援を賜りました。この席を借りまして、心からお礼申し上げます。

とりわけ本部事務局の関係部課、世話学部である法学部の方々には、並々ならぬご配慮をいただきました。有難うございました。さらに法学部、文学部の先生方や、附属図書館をご利用の方には、工事中、長期にわたる騒音、震動、雨漏りなどによって大変ご迷惑をおかけいたしました。心からお詫び申し上げます。

スラブ研究センターは、ソ連・東欧地域に関する総合的な研究機関であります。日本は昔から外国研究の盛んな国です。その中で一人ソ連・東欧研究だけは、大変立ち遅れた状態にあります。欧米の大きな大学に参りますと、必ず、ソ連・東欧研究所というものがございます。ところが日本には、わが北海道大学スラブ研究センター以外にそうした研究機関がありません。そのスラブ研究センターも、今まで決して平坦な道を歩んできたわけはありませんでした。

なぜ日本では、ソ連・東欧研究がこのようにないがしろにされてきたのでしょうか。私が見るところでは、それは、日本における外国研究のあり方と関係があります。日本の外国研究の特徴は実践的な関心が非常に強いことです。

まず先進的な諸外国から学ぼうという姿勢があります。かつての漢学、蘭学、また明治以来の日本の人文・社会科学はおおむねこのような関心に導かれてまいりました。この関心に立ちますと、模倣すべきものがない国は研究に値しないということになります。後進的なソ連・東欧諸国はまさにそのような国とみなされました。ただイデオロギー的な理由からソ連・東欧諸国に模倣の対象を見た人々だけが、研究に従事する傾向があったのです。

つぎに、日本がこれから進出する先を知っておこうという関心のもち方があります。戦前の支那学、朝鮮研究、南洋研究はこうした関心から生まれました。一時ロシア領シベリア、極東、樺太が日本の進出の対象と考えられ、研究が行なわれたことがあります。しかし、そうした可能性がなくなるとともに研究もまた立ち消えとなったのです。

三つめに、戦う相手を認識しなければならないという関心のもちかたがあります。周知のようにそうした関心が冷戦期のアメリカで、ソ連研究の引金となりました。日本でも戦争中同じ立場からソ連研究が行われました。しかし、その範囲はきわめて限定されたもの

でした。むしろ日本ではある国を敵とみなすと、逆に研究をやめてしまう傾向があったのです。たとえば、戦時中、「鬼畜米英」という標語がはやり、アメリカ研究やイギリス研究は禁止されてしまいました。

たしかに実践的な関心は学問的研究の刺激となります。しかし、いつまでも実践的な関心に導かれていては、学問は学問として自立することができません。わが国のソ連・東欧研究は、従来そうした実践的な関心の欠如あるいは過剰によって、発展が遅れたり、歪んだ発展を遂げたりしてまいりました。今後は実践的関心を十分に受けとめつつ、かつそれに対して、然るべき距離をおいて学問としてのソ連・東欧研究を確立することが必須であり、スラブ研究センターに課せられた使命かと存じます。

スラブ研究センターは、研究施設時代から数えますと、今年で26年目を迎えます。思えば、ソ連・東欧研究にとって必ずしも好ましくない冷戦という状況のなかで、学問的研究の灯をともしられ、守り抜いて来られた先達の方々には、多くのご苦勞があったことと推察いたします。しかし他方で、他の大学に先がけて、ソ連・東欧研究を引き受け、はぐくんだ、北大という寛容で、進取の気象に富んだ研究環境があったればこそ、そうしたことが可能だったのでしょう。スラブ研究センターは、今日見る通り立派に発展を遂げ、国際的にも注目を浴びるようになり、念願の建物増築もかないました。きょうのこの日を、スラブ研究センターの発展に尽された先達の方々、またそれを暖かい眼で見守って下さった北大の関係者の方々、とりわけ歴代の学長、法学部長とともに喜びたいと思います。

さいごに一言、スラブ研究センターは立派に成長いたしました。なお多くの問題を抱えております。今後とも皆様のご理解、ご協力を賜って、これらの問題の解決にあたりたいと思います。宜しくお願いいたします。